

# 中国東北地方の新石器時代における社会形態変遷の研究

富, 宝財

<https://doi.org/10.15017/1931670>

---

出版情報：九州大学, 2017, 博士（文学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：

氏 名 : 富 宝財

論 文 名 : 中国東北地方の新石器時代における社会形態変遷の研究

## 論 文 内 容 の 要 旨

新石器時代の中国東北地方では、農耕の出現と伝播、および気候寒冷化に従って、社会組織の複雑度が波形状に変化する。本論はこれを踏まえて、主集落と墓地の分析を通じて、異なる生業形態の社会組織についてそれぞれ解明し、また、それらの間の関係を論じたものである。

第1章では先行研究における課題、および本論における目的、方法を明確化した。先行研究のテーマとしては、主に以下の三つが存在する。

- (1) 集落に関する集落遺跡の分布・集落形態・居住単位の三部分に対する議論。
- (2) 墓に関する遼西地区の社会組織と白城・通遼と黒竜江地区の編年に対する議論。
- (3) 社会形態に関しては、遼西地区のみの考古学文化ごとの議論。

これまでの研究は、定住農耕の遼西地区を中心として、紅山文化までの社会複雑度が次第に高くなるという捉え方が主流であり、他地区の特質と地区間の関係が不明であった。本論では各地区の集落や墓によって、社会集団の時空間的变化・交流を説明することを試みるため、以下のような方法を採用した。

ア：地区ごとに集落や墓地の構成を解明する。これによって、各地区の特徴、及び隣接地区との関係を把握した（第2-7章）。

イ：アに基づき、気候環境と生業形態の変化の研究を参考し、社会集団の時空間的な変化・交流のあり方を解明する（第8章、終章）。

第2章では遼西地区の集落分析を行った。従来では、遼西の集落形態は恒常的に列状と捉えられた。本章では、紅山文化に至るまで年代順に、集落遺跡の数と規模、及び遺跡間の規模差が徐々に大きくなることを指摘した。集落形態は列状以外に、不規則・円形・半円形を含む四種類があり、大型住居址が居住目的以外に、祭祀を共有する集会所などの機能を持つことが判明した。居住単位は興隆窪文化を境界として、大型化と小型化という二通りの変化過程がある。

第3章では内蒙古中南部の集落分析を行った。従来は石虎山文化の石城集落の身に対して、社会の複雑化、社会集団間の緊張関係、狩猟採集民の南下という三つの原因により、それが出現すると解釈されてきた。本章では、遼西地区と同じの手順で分析した結

果、牧畜が出現する廟子溝文化を境として、その前段階（老虎山－王墓山坡下文化）と後段階（廟子溝－石虎山文化）を比較した場合、集落遺跡の数と規模、及び遺跡間の規模差と居住単位が徐々に大きくなることを示した。廟子溝文化では、生業の変化に従って性別分業が行われ、老虎山文化では、集落形態が多様化し、各集落に機能差も出現した。

第4章では遼東半島の集落形態分析を行った。学史において遼東北部の新楽文化では、集落が住居・住居列・住居群で構成されることが指摘されてきたが、南部では集落形態についての研究が行われていない。本章では、新楽文化が、遼西地区の趙宝溝文化と類似することを確認した。さらに、集落形態と居住単位は遼東北部と遼西の両地区で連動しているが、南部では集落形態が不規則であると同時に、居住単位の変化が少ないことを指摘した。

第5章では遼西地区の墓葬分析を行った。従来では、遼西地区の新石器社会は、等質・氏族・階層社会という順番に変化したと指摘されている。本章では、集落形態を参考にしつつ、各考古学文化の墓葬を分析した。結果、小河西と興隆窪文化が等質社会であり、趙宝溝文化に司祭者の共通集団が出現することが想定された。また、紅山文化において、祭祀対象と血縁関係では女性、祭祀活動では男性を中心とする階層社会が形成され、小河沿文化になると、男性を中心とした血縁関係の中、核家族を中心とした等質社会である可能性を指摘した。

第6章では白城・通遼地区の墓葬と集落分析を行った。従来では、白城・通遼地区の考古学文化の編年は主にC14年代により構築されてきた。本章の埋葬習俗の分析によると、第3段階までが男性を中心とした狩猟採集社会であったが、第4段階（哈民忙哈文化）に定住農耕社会へ変化、第5段階では、寒冷化の変化に従って、社会集団が再編されたことが想定された。

第7章には黒竜江地区の墓葬分析を行った。従来、本地区においては、各考古学文化の編年研究以外の研究はほとんどない。本章では、石鏃と玉器の分析に基づき、本地区の考古学文化の系譜を明らかにした。さらに、段階ごとに埋葬習俗を分析し、成年男性を中心とした小型血縁集団において、社会集団の組織者としての社会地位が次第に高まる可能性を示唆した。

第8章及び終章では、前章までの分析結果について考察を行った。集落形態は主に東西方向の、埋葬習俗は主に南北方向の交流が認められる。さらに、社会統合方式と基本的な社会単位の変化に基づいて3地域の変化を見出した。

結語では、中国東北地方は、遼西地区を中心に紅山文化まで安定的に農耕社会が発展

し、社会的に複雑化して行くとともに、さらに、遼東や黒竜江地区へと農耕を伝播させて行く過程を明らかにした。しかしながら、紀元前三千年紀の乾燥冷涼化により、これまでの農耕を中心とする南北方向の文化交流から、牧畜農耕を中心とする東西方向への文化交流の変化が認められる。内蒙古中南部から遼西地区への文化交流は、次の青銅器時代への地域様相の基盤をなすものである。中国東北地方の新石器時代の社会変遷は、東アジアにおける新石器時代から青銅器時代への転換に伴う、大きな地域間関係の変化を示すものであった。